

平成 22 年度第 2 回薬学教育 FD/ICT 活用研究委員会 議事概要

I. 日時：平成 22 年 12 月 17 日（金）15：30～17：30

II. 場所：私立大学情報教育協会事務局会議室

III. 出席者

松山委員長、(黒澤副委員長)、大谷委員、大嶋委員、松野委員、齊藤委員、
梶原アドバイザー
(事務局) 井端事務局長、森下主幹、平田職員

IV. 議事概要

1. 学士力（コアカリ）実現に必要な ICT 活用について

★まず配付資料の説明の後、続いて事務局より、私情協が各系委員会を通して 5 年先の授業デザインを考えることの目的が説明された。

将来の雇用に関する危機感

日本企業への就職をめぐりアジアの学生と日本の学生との間で競争が激化し、将来に日本国内のマネジメントポストがアジアの人々に占有されていく恐れがある。この理由として、これまでの日本における高等教育問題の付けが回ってきていることが考えられる。現場の教員から高等教育改革の必要性について情報発信をしてほしい。

国際的競争力を身につけさせるための今後の高等教育の在り方

- ・現状の座学中心の授業形態では知識が身に付きにくいことは明白で、これからは座学と体験型授業との一体性のある教育が必要であり、そのモデルとして少人数グループ学習や振り返り学習が導入されるべきである。
- ・単位を修得するためのグループ学習ではなく、自分が学んだ内容を社会に情報発信していくという新しい授業スタイルを通して、学生の動機付けをしていくべきである(高等教育と社会が一体となった変革を期待)。
- ・単に専門知識を習得しただけの専門家ではなく、市民や社会とのバランスを総合的に考えて行動できる専門家の育成が必要になる。
- ・アナログ型(対面型)授業の重要性を再認識し、これを拡大する必要がある(ICT はコミュニケーションのための道具あるいは目的達成の手段としてのツールという位置付けでよい)。
- ・学びをグローバルに通用するものにするために、1 大学だけでなく、他大学教員や社会人との連携による「思考」を重視した学びを身に付けさせることが必要ではないか。
- ・教養教育と専門教育の融合を意識し、薬学と社会との関連づけなど、教養教育と結びつけた授業デザインを検討していくべきはないか(道具を考えるのではない)。

★事務局の説明に対する意見交換の抜粋は以下の通り。

- ・社会と高等教育の一体化の取り組みとして、近畿大学では近隣の住民に模擬患者として実習(調剤、服薬指導)に参加してもらっているが、学生からの評価は高い。リベラル教育の不在が国際的学士力の低下に繋がっているのではないか。
- ・日本の医学、歯学の教育水準は欧米の基準と大きくかけ離れており、国際的に通用していない。欧米では医者としての姿勢(教養)が厳格に教育されている。

- ・獣医学に関しても、欧米は家畜が中心であるが、日本はペット中心の教育になっている。
- ・日本は高大連携が弱く、理科の学習指導要領を把握していない理系大学教員が多い。大学側が連携を意識して教育を行うべきであり、また高校教育の問題点を大学教員が指摘しながら互いに議論を深めるべきである。
- ・高大連携については学習到達度試験を実施することが北海道大学で検討されており、高校を卒業して何ができるのかが明示される。
- ・病院や薬局に限らず、社会のあらゆる場面で薬学を学んだ人が活躍する機会があるのではないか。将来的には薬学と看護学、栄養学の一体化も必要になる。
- ・6年制教育によって生み出される薬剤師の違いはまだ明確でないが、病院においてはサイエンス・ファーマシスト、企業においてはファーマシスト・サイエンティストという役割を担えば、6年制薬剤師として意味があるのではないか。
- ・1年生から基礎と臨床をリンクした授業を実施しているが成果があがっていない。暗記型教育も知識としては必要で、それがないと応用教育が成り立たない。自分の講義の中では可能であるが、薬学教育全般や分野横断的に学ぶことになると、かなりのマンパワーが必要になる。
- ・学生が多様化している中で、習熟度別教育(苦手分野別教育)の導入が必要。
- ・大学間連携で意見を発表して講評することは行っているが、あまり広まっていない。
- ・ファシリテータを育成して教育に参加させることで5、6名のグループ学習を活発に行うことができるのではないか。
- ・薬学ではファシリテータは国家試験対応で無理なので、社会人に入ってもらふことになる。
- ・国家試験合格を目的している学生では、あまり積極的な参加が見られずグループ討議の少数化につなげられない。

★引き続き、前回の委員会でまとめられた3つのテーマに基づく授業モデルの具体案の検討に入った。提示された案は「ICTを活用した個々の学生の習熟度の解析」のみだったため、今回はこれを中心に議論を進めることとした。

【授業モデル案として、前回検討した内容】

- ①実務実習に関する内容をフィードバックする場合、継続的・形成的な評価をするために活用する。(学生の問題点の抽出)
- ②総合問題を提示し、クラスター分析をすることにより、学習効果を測り、教育につなげていく。(個々の学生の理解力の解析)
- ③学びの動機付けのためのリメディアル教育で構築していく。

【検討する授業モデルの確認】

私情協として従来にない斬新な教育方法を提示することが主目的であり、授業の組み立て方を根本から見直し、それに対してICTの活用を検討していく。

「ICTを活用した個々の学生の習熟度の解析」(3,4年次学生を対象)の骨子
詳細は配付資料参照

- 1) 学生の習熟度を評価するための問題を Web ベースで解答させて、理解不足の根底に

ある基盤的学問領域を的確に判断する。

- 2) 不足した学力を補うためにグループ分け(クラスター分析)した上で、同一時間にグループ毎に異なる基盤領域を再学習させる。
- 3) ICT を活用した小テストにより形成的評価を行い、それをフィードバックしながら苦手科目を克服させる。

この案は上記②に該当する。

★様々な意見交換が行われた結果、本委員会としては今回提案された事例をベースに成績下位学生の基礎学力向上を目指した授業デザインの検討を進めることとした。さらに、基礎に続くステップとしての応用(発展)的学力の向上を目指した授業デザインと、総合力の向上を目指した授業デザインについても同時に検討を進めることとした。

→ 話し合いの中でポイントして指摘されたのは、学生をグループ分けした後の教育をどのような手段で実践していくか、弱点を発見した後で具体的にどのように学び直しの授業をデザインするか、などであった。

今後の方針

- ・基礎学力、応用(発展)的学力、総合力を中心に検討する。
- ・基礎学力については苦手領域の学力不足を克服するという「ICT を活用した個々の学生の習熟度の解析」の事例を中心に検討するが、他の2つについては別のアイデアを考えていく必要がある。
- ・現実にその授業を実現できるかどうかには囚われず、5年後を意識した授業をデザインする。

2. 次回までの宿題

各委員で基礎、応用、総合の3つの能力育成の中からいずれかの授業モデルを考案し、1月19日(水)までにメールリスト宛に送付する。次回委員会で提出された案を議論し、本委員会として提示する授業モデルを絞り込む。

V. 次回の開催日程

日時：平成23年1月26日(水) 11時から13時まで

場所：私立大学情報教育協会事務局会議室

以上